

年) 中、サーダート暗殺を執行したジハード団のイデオログであったファラジュ (ファラグ/‘Abd al-Salām Farāḡ, 1954年頃～1982年) が著した54頁から成るマニフェスト『隠蔽された義務』(隠された義務³⁴⁹; *al-Farīdah al-gā’ibah*; 1981年に初めて公開) を論駁した長大なファトワーを発行し、この功績により、81年10月に権力の座に就いたばかりのムバラク大統領によってジャーダルハックは、82年1月に宗教財産(ワクフ) 大臣に任命され(在位、1982年1～3月)、3月にはアズハル総長(在位、1982～96年) に就任、その後も、過激派を非難する声明を発行し続けるなどしている。この事例が典型的に示しているように、アズハルは、スンナ派イスラームを代表する権威として、ジハード主義などに対抗する役割を多く担ってきた。

しかし同時に、上でも指摘したように、そのような機能の遂行を中和化・相殺する側面として、アズハルなど、これらの宗教組織に働く者の多くが、国家による支配の圏域の外部で発生した「ダアワ」(da‘wa; イスラームの「呼びかけ」) の領域に見られる多様な展開に敏感に反応し深く関与してきている。そしてこの敏感な反応は、イスラーム主義運動によって維持され大衆に広められている倫理的態度と感情の構造に、その力の源を持っているのであるという。

ダアワ (da‘wa) とエジプトにおけるイスラーム主義 (1): ムスリム同胞団

以下では、上述した「ダアワ」、そしてそれと深く結びついた、サラフィー主義的なイスラーム勢力、特にムスリム同胞団の変遷と、そこにおけるダアワの意義などについて詳細に見ていく³⁵⁰。

予想されるように、この種の、より原理主義的なイスラーム勢力は、エジプト国家権力によって、アズハルなど、上で見てきた類のイスラーム既成勢力と比べ、弾圧の対象となることが多かった。たとえば、ハサン・バンナー (Ḥasan

349 ここで義務 (ファリーダ/ *farīdah*) は社会的義務ではなく、神によって命じられた義務という共示を持ち、ファラジュの議論は、信仰、礼拝、喜捨、断食、巡礼という五行 (信仰の5つの柱) 以外にもムスリムの義務は存在し、それら従来、隠されてきたムスリムの義務の1つが、信仰の第6柱、すなわちジハードである、というものである (大塚、2000: 206-207)。

350 巻末注65参照。

al-Bannā', 1906～49年) によって1928年に設立されたムスリム同胞団 (al-Iḥwān al-Muslimūn) は、当初は教育と福祉に焦点化し、政治的には穏健な組織であったが、第二次大戦終結後の混乱期中で過激化し始め、48年12月に同胞団の学生がヌクラシー首相 (al-Nuqrāṣī Bāṣā (Paša), 1888～1948年) を暗殺、そして当時、イギリスがその育成に注力していたエジプト警察の諜報組織 (秘密警察) の長官も殺害している³⁵¹。これに対して秘密警察も、49年にバンナーを暗殺 (享年43歳) するなどといった応酬の挙句³⁵²、1952年の自由将校団によるクーデター (7月革命)、翌年の王政廃止 (「エジプト革命」) を経て権力の座に就いたナーセルによって同胞団は1954年に弾圧・非合法化されている³⁵³ (Krämer, 2010: 122-123)。これを承けて、1953年に同胞団に加わり1960年代にその著作をとおして多くの若者を魅了し、後に「イスラーム主義の父」と呼ばれることになるサイド・クトゥブ (Sayyid Quṭb, 1906～66年) がジャーヒリー

351 これ以降、一貫して警察・内務省は同胞団をテロ組織と同定し、監視を続けることとなる (長沢, 2012b: 178-179)。

もちろん、近代エジプトにおける政治的暗殺の歴史はこれが嚆矢ではない。たとえば、ワルダニー (Ibrāhīm Nāṣṣif Wardānī, 1886～1910年) —— すなわち、ウラービー革命 (1879～82年) が失敗した後、ワタン (祖国) 党 (al-Ḥizb al-Waṭānī) を結成して反英民族運動を推進したムスタファー・カーミル (Muṣṭafā Kāmil, 1874～1908年) の熱狂的な支持者であり、ローザンヌ留学中にロシア人革命家やアナキストと交流があったとされるワルダニー —— によるコプト系のプトロス・ガーリー首相 (Buṭrus Ḡālī, 1846～1910年; 在位, 1908～10年) の暗殺などが知られている (Khuri-Makdisi, 2010: 130; Jakes, 2020: 191)。

(なお、ガーリー首相は、後の、エジプトの外交官で国連事務総長となったプトロス・プトロス・ガーリー (Buṭrus Buṭrus Ḡālī, 1922～2016年) の祖父である。また、後者の甥に当たるのが、2004年から2011年にかけてムバーラク政権で財務大臣を務め新自由主義経済改革を率いた経済学者のユーセフ・プトロス・ガーリー (1952年生まれ) で、彼は、2011年エジプト革命後、多額の公金の不正支出の疑惑をかけられ国外逃亡した容疑者たち —— ムバーラク政権期の腐敗を体現する容疑者たち —— の1人である (長沢, 2012b: 50; 2019: 293)。

352 卷末注66参照。

353 卷末注67参照。

ヤ論を唱えて同胞団のイデオログとして抬頭した³⁵⁴。この理論によれば、現代も、ムハンマドが現れる以前のようなジャーヒリーヤ (Ġāhiliyyah; 神の正しい教えが見失われた無明時代) と墮した状態の只中に置かれており³⁵⁵、イスラームの敵である無宗教者、ユダヤ人、キリスト教徒、十字軍、モンゴル帝国、共産主義者、資本主義者、植民地主義者、シオニストなどが密かに共謀し³⁵⁶、ナーセルとその政権を支援しているため、イスラームの本義に立ち返り、この陰謀勢力の野望を打ち砕く必要がある、とされていた。クトゥブは1954年に逮捕、長期の強制労働を課せられ拷問によって獄中病院に送られるなどした後、1964年にイラク大統領の仲介で釈放、しかしその翌年、獄中の著作『道標』(道しるべ、里程標; *Ma'ālim fī al-Ṭarīq*; 1964年出版)により国家転覆を煽動したとして再投獄、1966年に他の団員2名と共に処刑されている(中村廣治郎、1997: 143)。こうして殉教を果たしたクトゥブと彼が監獄でしたためた著書、浩瀚なクルアーン注釈である『クルアーンの蔭で』(*Fī Ṣīlāl al-Qur'ān*, 1951~65年)や³⁵⁷、彼の政治論の梗概『道標』などは、その後、アル=カーイダなど、イスラーム主義の諸団体に多大な影響力を持つことになったという³⁵⁸(大田、

354 卷末注68参照。

355 もちろん、イスラームの正統的な教義でも、神の御言葉が人間へと啓示されたムハンマド、およびその教友の時代(スンナ派の場合は正統カリフの時代、シーア派の場合はカリフ位の篡奪者であるアブー・バクル、ウマル、ウスマーンの治世を除きアリーの時代のみ)が「聖史」、「黄金時代」、「理想の時代」であり(菊地、2009: 57)、ウマイヤ朝に始まるそれ以降の時代において人類の歴史は漸次的に墮落していき、ムハンマド以前の無明時代に近似していく(あるいは少なくとも墮落を繰り返す)と捉えられている。このような「没落史観」に基づけば、イジュティハード(権威に追従せず独自の判断を行うこと)よりも、聖史やそれに近い時代に為された権威に基づく法的解釈への追従、すなわちタクリードが尊ばれることは、いわば自然なことになるのだが、近代主義者、特にサラフィー主義者は、以下の傍点部分に、イジュティハード(クルアーンなど、原典・法源に遡って法的解釈を自ら独自に行うこと)をタクリードに優先する根拠を見出すことができる。

356 卷末注69参照。

357 卷末注70参照。

358 卷末注71参照。